

化実現へ奮闘中

作者は筑摩書房
草創期の編集長
白井吉見

完結まで
10年
原稿用紙

5,600枚

「そうだな、どこもよかったが、オランダなんか、わるくなかった。……いや、景色が良かった。なるよ、日本だ。そう、この安曇野だよ。この五月、さつきの唄がやないが、この原っぱにわらびが出て、鬼つづきの咲くころ、安曇野がたんげの花で埋まるころ、雪の消え残った常念や鍋冠山が、すぐうしろにひかえてさ、こんな美しいところは、どこにもないよ」
（『安曇野』第2部その十三より引用）
荻原碌山の言葉

小説『安曇野』

登場人物はなんと総勢
2,000人

信州に結ばれた若者たち5人の
出逢いと別れ
舞台は安曇野、東京。さらには、
米国、フランスにも。明治から
昭和を駆け巡る壮大なドラマ。

- “アンビシャス・ガール” 相馬 黒光
- “日本近代彫刻の先駆者” 荻原 碌山
- “信州のペスタロッチ” 井口 喜源治
- “民主主義と非戦の先達” 木下 尚江
- “新宿中村屋の創業者” 相馬 愛蔵

※小説の登場人物（一部抜粋、順不同）

桐生悠々、平林盛人、板垣退助、北村透谷、佐藤藤山(嘉市)、島崎藤村、田中正造、布施淡、松澤求策、伊藤博文、大杉栄、石川三四郎、清澤洌、幸徳秋水、西園寺公望、高村光太郎、島木赤彦、徳富蘆花、トルストイ、中原悌二郎、中村彝、樋口一葉、山本安曇、二葉亭四迷、逸見斧吉、森鷗外、赤羽王郎、岡田虎二郎、オーギュスト・ロダン、神近市子、志賀直哉、島村抱月、松井須磨子、田中紅涙、坪内逍遙、北条虎吉、武者小路実篤、柳敬助、ラス・ビハリ・ボース、山本飼山、ワシリー・エロシェンコ、芥川龍之介、石川啄木、犬養毅、足立正、荒畑寒村、唐木順三、オリヴァ・クロムウェル、小林多喜二、斎藤茂吉、国木田独歩、松本克平、四方千香子、杉山元、スバス・チャンドラ・ボース、谷崎潤一郎、頭山満、長尾壱太郎、河上徹太郎、防須哲子、石井柏亭、市川慶蔵、大宅壮一、北大路魯山人、高村光雲、太宰治、土門拳、夏目漱石、バーナード・リーチ、古田晁、松尾芭蕉、内村鑑三、和辻哲郎、宮下太吉、徳富蘇峰、戸張孤雁、中村不折、浅井洌、青柳さく子、中村太八郎、安部磯雄、海老名弾正、荻原本十、北原白秋、西郷隆盛、黒田清輝、菅谷伊和子、相馬安兵衛、滝沢馬琴、石垣綾子、田山花袋、長田秀雄、鶴田吾郎、乃木希典、中村亮平、巖本善治、福田英子、山本鼎、吉井勇、伊藤信子、内田良平、石井鶴三、桂井当之助、菅野須賀子、黒岩協、竹久夢二、羽田武邦、ビンセント・ファン・ゴッホ、望月平一郎、山県有朋、浅輪小菊、生田春月、伊藤純枝、岩波茂雄、小川虎之助、加藤章一、川井運吉、菊池寛、佐野学、下中弥三郎、杉山茂丸、スタンレー・オホツキー、風巻久美子、武内圀衛、佃信夫、鶴岡和文、浜口雄幸、フランソワ・ミレー、白井喜代、小林多津衛、久松喜世子、布施喜久子、三木清、八代六郎、小林一茶、矢内原忠男、山田健三、矢吹慶輝、若槻礼次郎、渡辺海旭、青柳優、ポール・ルクリュ、荒木貞夫、吉江孤雁、ダグラス・マッカーサー、尾崎秀実、片山敏彦、金子武藏、久保延雄、桑原武夫、山口孤剣、与謝野晶子、木下操子、松岡弘、矢島麟太郎、大島徹水、赤羽巖穴、平塚雷鳥、アグネス・アレキサンダー、伊藤野枝、葛生能久、中谷勲、甘粕正彦、有島武郎、上条蝘司、葉山嘉樹、務台理作、斎藤茂、山田貞光、高橋茂、防須俊子、片山潜、横山拓衛

令和5年度 長野県地域発元気づくり支援金活用事業
※本誌掲載の情報(本文、写真、イラストなど)を著作権者の承認なしに、無断で転載することを禁じます。

近代日本の社会、文化、思想 小説ひらけば、まるわかり

第1部

第2部

第3部

第4部

第5部

作者 白井 吉見
(1905年～1987年)



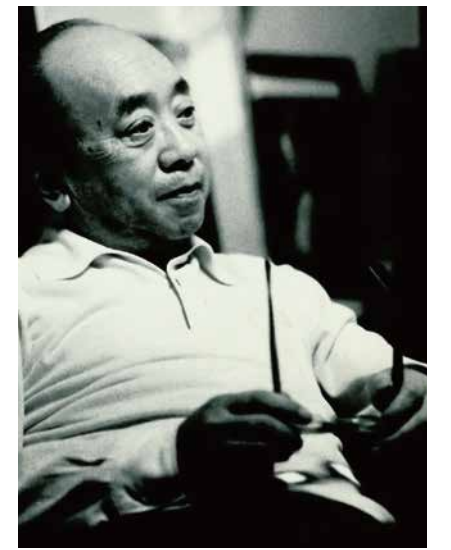
時は1898(明治31)年。仙台出身の相馬良(黒光)が、夫・愛蔵の故郷の穂高(現・安曇野市)へ移り住んだ翌年から物語は始まります。荻原守衛(碌山)と良の出逢いや、国内外で活躍する人材を輩出した井口喜源治による私塾「研成義塾」創設のほか、若き木下尚江の活躍を描写。自由民権運動の旗手として知られる松澤求策(穂高出身)の生きざまや足尾銅山鉍毒問題など、この時代の政治や社会にも触れます。

主な舞台は、1901(明治34)年に相馬夫妻がパン屋「中村屋」を創業した東京へ移ります。相馬夫妻は更なる飛躍を目指して東京・新宿に支店を開業。時を同じくして彫刻家の荻原碌山は、フランス・パリから帰国した後、近くにアトリエを構えました。良への思いを募らせながら作品の制作に没頭。絶作となる《女》を完成させ、1910(明治43)年に30歳という短い生涯を閉じた碌山の最期までを描きます。

時代は大正に入ります。本店となった東京・新宿の中村屋には、洋画家の中村彝や彫刻家の中原悌二郎をはじめとする芸術家のほか、盲目のロシア詩人ワシリー・エロシェンコらが集うようになりました。一方、インドの独立運動家ラス・ビハリ・ボースが1915(大正4)年に日本へ亡命し、中村屋がかくまいます。第3部では、こうした立場や境遇の異なる多種多様な登場人物たちの群像劇が描かれます。

昭和初期に世界恐慌が始まり、満州事変や日中戦争といった戦時体制に移行する中、1937(昭和12)年に木下尚江、翌年には井口喜源治と、第1部から活躍してきた物語の主要人物がそれぞれ生涯を閉じます。喜源治の死去により私塾「研成義塾」も30年余の歴史に終止符を打ちます。1945(昭和20)年の東京大空襲で、中村屋の本店のほか、工場などが消失。太平洋戦争の終戦とともに第4部は幕を閉じます。

太平洋戦争後、再出発した中村屋は、苦難のうちにも発展してきます。店を次代へ引き継いだ相馬愛蔵は1954(昭和29)年に死去。後を追うように相馬良も翌年に亡くなり、主要人物5人は全員物語を去ります。一方、作者の白井吉見自身が登場人物の一人として物語の中に現れ、小説『安曇野』の重要なテーマともいえる天皇制や戦争責任について触れていきます。そして、ある人物が碌山美術館を訪れると…。



長野県南安曇郡三田村(現・安曇野市堀金)出身。旧制松本中学校(現・長野県松本深志高等学校)、旧制松本高等学校(現・信州大学)を経て東京帝国大学国文科(現・東京大学)を卒業。県内外で教鞭をとる傍ら、親友・古田晁の興した筑摩書房の経営を助けた。1946(昭和21)年、筑摩書房「展望」の初代編集長に就任し、多くの作家や評論家を世に出す一方、自らも近代文学を中心に個性的な文芸評論を発表。1974(昭和49)年、10年の歳月をかけて完結させた『安曇野』全5部作により、第10回谷崎潤一郎賞を受賞しました。



・長尾李太郎 《亀戸風景》
後に彫刻家として大成する荻原守衛はこの油絵に衝撃を受け、芸術家を志すようになったといわれています。この油絵は誰が持ってきたのでしょうか。第1部その三を開いてみてください。



・荻原碌山 《女》
荻原碌山の絶作《女》は、ある人物をモデルにしたともいわれています。その人物とは誰でしょうか。第2部その二十五にヒントが隠されています。



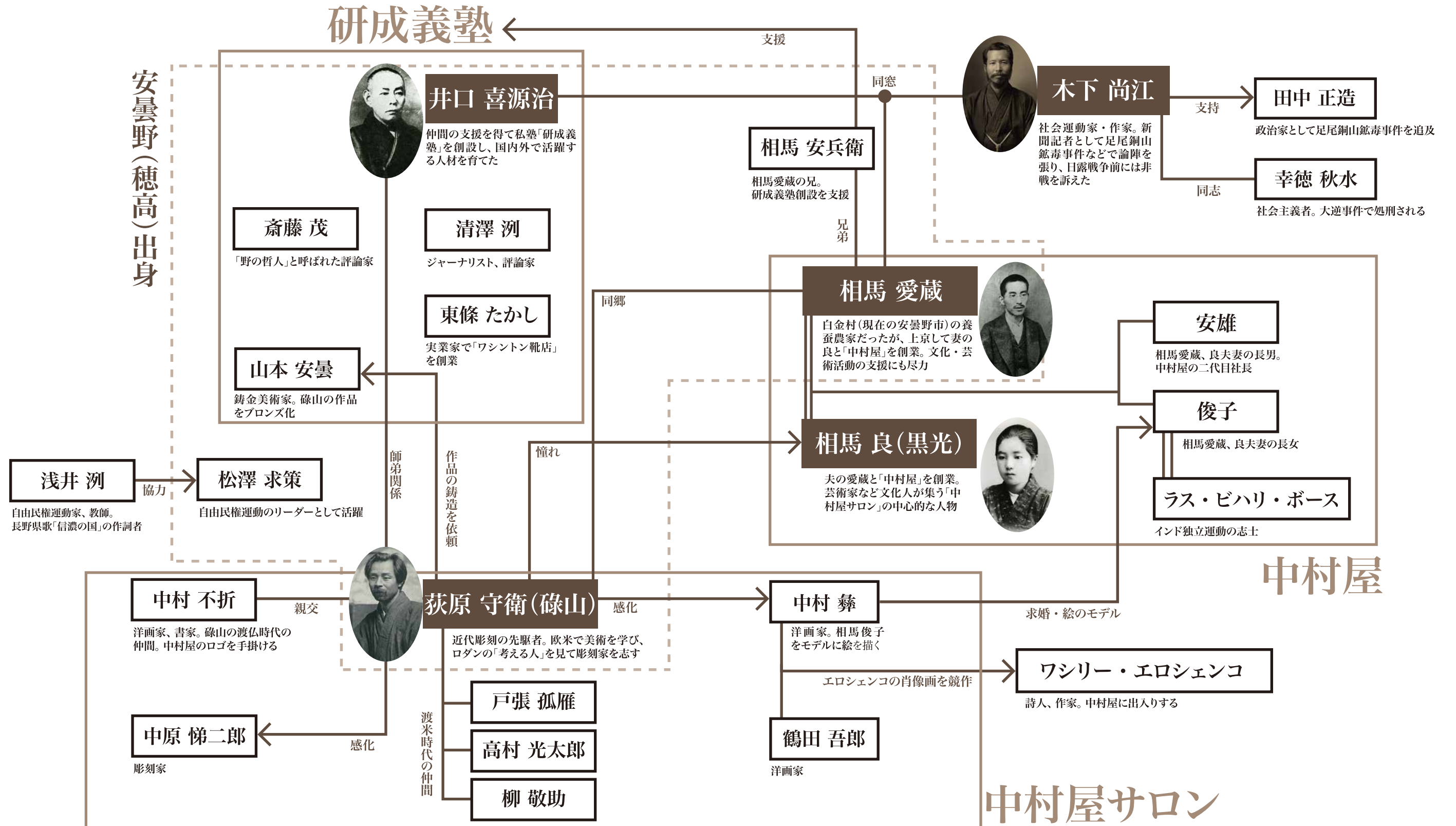
・創業当時の中村屋
小説『安曇野』の主な舞台となる中村屋。相馬夫妻は1901(明治34)年、ある場所にあったパン屋を居抜きで買い取って商売を始めました。その場所はどこでしょうか。答えは第1部その十八です。

登場人物

ページめくれば人物ずらり
あなたの推しも、きっと見つかる

小説『安曇野』の特長は登場人物の多さにあります。なんと、その数は総勢2,000人を超え、ほぼ全員が実名で書かれています。ページをめくれば、どこかで聞いたことのある名前が必ず現れます。お気に入りの人物にも出会えることでしょう。

それぞれの登場人物は、不思議な縁でつながり、複雑に関係合っていきます。主要な人物を中心に、相関図をまとめました。小説を読む際の参考にしてください。



関連施設

ゆかりの場所、あちこちに 小説登場の品々にも出会える

小説『安曇野』にゆかりのある場所は数多く存在します。物語の出発点の安曇野市穂高を中心に、東京都内にある関連施設をご紹介します。

小説を読んでいなくても楽しめる場所ばかりです。ぜひ、足を運んでみてください。

※掲載情報は令和5年9月時点です。

詳細は各施設へ直接お問い合わせください

写真提供：新宿中村屋
東京国立近代美術館
台東区立書道博物館
公益財団法人 新宿未来創造財団
松本市歴史の里
碌山美術館
井口喜源治記念館
白井吉見文学館

東京国立近代美術館

昭和27年に開館した日本初の国立美術館です。近現代の美術作品で、荻原碌山の彫刻《女》や中村彝の油彩《エロシエンコ氏の像》(重要文化財)をはじめ、高村光太郎、鶴田吾郎など、小説『安曇野』ゆかりの作家の作品も所蔵しています。

◆所在地 東京都千代田区北の丸公園3-1
◆TEL 050-5541-8600(ハローダイヤル)



新宿区立中村彝アトリエ記念館

大正5年に洋画家の中村彝が新築した下落合のアトリエを復元・整備し、平成25年に新宿区立中村彝アトリエ記念館として公開しました。彝の生涯や作品をパネルや映像で紹介しています。

◆所在地 東京都新宿区下落合3-5-7
◆TEL 03-5906-5671



木下尚江生家(松本市歴史の里)

江戸時代後期に建てられた下級武士の住宅で、木下尚江は明治2年にこの家に生まれました。生家は元々、松本市天白町(現在の松本市北深志)にありましたが、昭和58年に松本市歴史の里へ移築されました。

◆所在地 長野県松本市島立2196-1
◆TEL 0263-47-4515



中村屋サロン美術館

明治末期から大正、昭和初期にかけて、新宿中村屋には多くの芸術家・文化人たちが集いました。その様子は「中村屋サロン」と称され、日本近代美術史にその名を刻みます。中村屋サロン美術館は平成26年、彼らが集まったその場所に開館しました。

◆所在地 東京都新宿区新宿3丁目26番13号
新宿中村屋ビル3階
◆TEL 03-5362-7508



ウェブサイト→

台東区立書道博物館

洋画家であり書家だった中村不折が収集した、中国・日本の書道史上重要な資料を有する博物館です。重要文化財12点を含む約16,000点を所蔵し、不折の書画やデッサン、挿絵なども展示しています。

◆所在地 東京都台東区根岸2丁目10番4号
◆TEL 03-3872-2645



1 碌山美術館

日本近代彫刻の扉を開いた荻原守衛(碌山)の作品や資料を保存・公開するため、昭和33年に開館。高村光太郎、中原悌二郎、戸張孤雁、柳敬助など、碌山と関係の深い芸術家の彫刻や絵画なども展示しています。

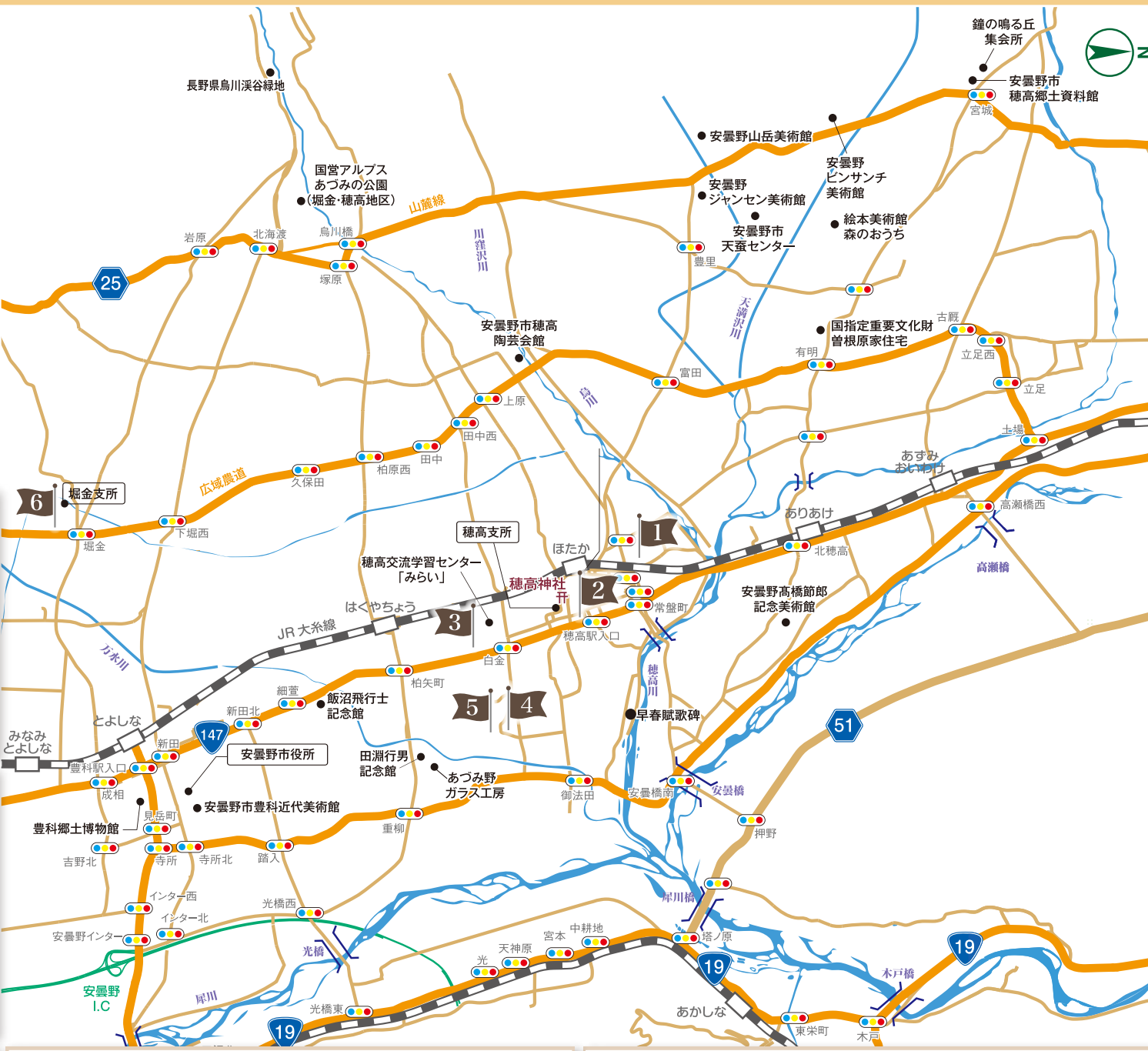
◆所在地 長野県安曇野市穂高5095-1
◆TEL 0263-82-2094



4 相馬家

安曇野市穂高白金にある相馬家の洋館は、小説『安曇野』第1部の舞台として何度も登場します。その洋館は現在も残っており、当時の面影を感じることができます。建物内には荻原守衛が画家を志すきっかけとなったという長尾奎太郎の《亀戸風景》が飾られています。※建物内は普段、非公開となっています。

◆所在地 長野県安曇野市穂高2045



2 井口喜源治記念館

私塾「研成義塾」を創設した井口喜源治と、その教え子たち、交流のあった人々の手紙や資料などを保存・紹介しています。相馬良(黒光)が、嫁入り道具として持参した愛用のオルガンも館内で見ることができます。

◆所在地 長野県安曇野市穂高4312
◆TEL 0263-82-5570



3 研成義塾跡

井口喜源治が創設した研成義塾は明治31年、当時の穂高村矢原の集会所を借りて創立されました。その後、新校舎が建設され、明治34年に移転しました。現在、それぞれの場所には跡地を示す碑が残っています。右の写真は研成義塾跡にある石碑です。

◆所在地 研成義塾跡：長野県安曇野市穂高1800-4
研成義塾創設の地跡：長野県安曇野市穂高1306-1



5 荻原守衛(碌山)の墓

荻原守衛(碌山)の墓は、安曇野市穂高矢原の守衛の生家近くにあり、「故碌山荻原守衛之墓」の墓碑銘は書家の中村不折によって書かれました。守衛は渡仏中に不折と親交を深めており、墓碑銘に2人の仲の深さを感じることができます。

◆所在地 長野県安曇野市穂高2020南付近



6 白井吉見文学館

作家、編集者、評論家、教育家として活躍した白井吉見の業績を紹介。小説『安曇野』の原稿用紙5,600枚のほか、筑摩書房創業の同志である古田晃(創業者)や唐木順三(顧問)との交流の深さを示す品も展示されています。

◆所在地 長野県安曇野市堀金鳥川2701
◆TEL 0263-71-5123(安曇野市文書館)

